社会教育と福祉を統合した地域づくりを目指す「社会教育福祉」実践
―岐阜県多治見市における「交流センター」の取組―

細田修[1)]・益川浩一[2)]
[1)]公益財団法人多治見市文化振興事業団総務企画課（〒507-0034 多治見市豊岡町 1-55）
[2)]岐阜大学地域協学センター（〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1）

1. 社会教育と福祉を統合した「社会教育福祉」

地域において社会教育と福祉は密接な関わりがあり、両者が融合・統合して実践が展開されることにより豊かな地域づくりが可能になると言われている[1)]。長野県松本市や島根県松江市などでは、公民館と福祉ひろば、社会福祉協議会を拠点にして、社会教育と福祉が融合したSozialpädagogik（社会教育学、ドイツ）が普及し始めている。こうした社会教育と福祉を統合した領域を、松田武雄は「社会教育福祉」と定義し、現代のリスク社会に抗することができるような「社会教育福祉」のシステム構築の必要性を提言している[2)]。

本稿では、社会教育と福祉を統合した領域である「社会教育福祉」を、地域において具体的に体現、実践していると考えられる岐阜県多治見市における「交流センター」の取組を報告する。

2. 公民館と児童館の複合施設の管理運営

2-1. 既存のボーダーを無くし「地域の拠点施設」を追究

多治見市根本交流センター
（写真１）

公民館は、その時代に生きる人々に必要とされる施設であり続けることを目指し、社会や生活の状況に呼応するようにその役割を少しずつ変化させてきた。児童館についても、子どもたちを取り巻く環境の変化によって幅広い職務内容を期待されるようになり、両者の事業領域は重なり境目が無くなろうとしていた。そんな中、公民館と児童館から構成される複合施設、多治見市根本交流センターが設立されたが、指定管理者である（公財）多治見市文化振興事業団は、両機能を持つ交流センターを時代が要請した新しい形の公共施設（公共スペース）と捉え、重なりを見せていた境域を無理に分けようとせず、市民目線の一体的な運営を推進しようとした。そして、公民館と児童館の枠組みに囚われない柔軟な運営、社会教育と福祉の分野を横断した地域づくりへのアプローチ等の実績を積み重ね、8 年目を迎えた 2020 年度には文部科学省による全国優良公民館表彰を受賞するなど、根本交流センターの先駆的かつ特色ある運営方法が注目を集めるまでに至った。

設立当初に話を戻し、多治見市根本交流センターの設置管理条例には、運営の基本として「複合施設の有機的連携」が定められた。それを実現するべく、一般的には公民館・児童館として運営し、その上で連携を図ろうとするが、（公財）多治見市文化振興事業団はそういった既存の方法ではなく、公民館と児童館のボーダーを取り払い、丸ごと「地域の拠点施設」と捉えて運営する方が、交流センターの価値を最大限に引き出すことができると考えた。時代と根本地域が求めるのは、対象を限定しない公共スペースを有効に活用する運営、すなわち、より多くの市民に「根本地域に交流センターがあってよかった」と感じていただくための運営であり、そのゴールを目指して「根本交流センター＝地域の拠点施設（プラットフォーム）」という姿を追究していくことにした。

実際、根本交流センターに足を踏み入れると、どこから公民館でどこまでが児童館なのか、両者を隔てる境界や壁を感じさせない空間が広がり、「ここはみんなの家」とのメッセージが伝わってくる。そういった意味では、玄関を入ってすぐのロビーは象徴的である。折り紙や塗り絵を楽しむ幼児の遊び場、子育てママの談笑、創作サークルの作品展示、高校生の自習、人気の図書が並ぶ棚、撮影スポット、クイズやアンケートの企画など、世代を問わず多種多様な方法で過ごす光景が見られるのは、職員が「地域の拠点施設」を目指した空間設定、地域の方々が自然に交差するような動線に留意しているからである。ロビーの活用方法を通して、根本交流センターが「みんなの家」のイメージ、あらゆる世代が快適に活動できる「温かい居場所」であることを印象づ

けると同時に、社会教育と福祉の両分野で抱えている課題「地域の縁側機能」を果たすことにも成功している。

乳幼児の遊び場（写真２）

ハロウィーンの撮影スポット
（写真３）

ギャラリーＮＥＭＯＴＯ
（写真４）

2-2. 公民館・児童館融合の運営体制を構築

ロビーが見渡せる場所に位置するのが、交流センターの事務室である。ワンスペースということもあり窓口サービスは一つに統合され、交流センターに係わるあらゆる情報と業務が集まる。窓口の職員は、子どもからは「先生」と呼ばれ大人からは「〇〇さん」と呼ばれるなど、ここでは横断的かつ幅広い職務を遂行する人材が求められ活躍することができる。そのため、施設長（交流センター所長）を責任者とした一元的でシンプルな組織体系が適している。小規模な交流センターで細かな分業制を敷くと効率・生産性は下がり、従事する職員は交流センターの全体像が見えにくくなってしまう。複合施設であることを生かして成果を上げる、職員のマンパワーを効率良く組織的な動きに変えることを考えると、交流センターの運営のベースには融合的かつ一元的な職員体制を据える必要があった。

交流センターの融合的な職場環境は、特定分野にある固定概念、慣習、横並びのバイアス等から解放され、広い視野で物事を捉える考え方を身につけることができる。また、「Ｔ型人材」[3)]と呼ばれる、特定の領域に精通するだけでなく他分野の知見やスキルを持った人材へと成長しやすい環境にあると言える。職員と組織のマネジメントを含めた、あらゆる方向性（ベクトル）が揃っているからこそ、全国的に珍しい公民館と児童館の組み合わせに挑み、既存の捉え方ではない時代のニーズにマッチした運営を行い、かつ持続可能な形で発展させていくことができたと考えられる。

3. 交流センターの特色ある取組

3-1. 公民館と児童館の特長を生かすためのフレームワーク

根本交流センターが全国優良公民館表彰を受賞した 2020 年度、（公財）多治見市文化振興事業団が運営する精華公民館が改装され、児童館機能を有する多治見市精華交流センターが誕生した。根本交流センターの管理運営が成功事例として認められた証であると感じ、このタイミングで交流センター事業を特徴づけている共通点を探り、事業企画のフレームワークを見出すことを試みた。

例えば、乳幼児を持つ親の相互交流に学習講座を加える事業、優れた地域の人材を登用した保育プログラムを企画したが、いずれも児童福祉施設が取り扱う事業内容において、学ぶ意欲や住民主体の地域づくりという生涯学習の要素・価値を付け加えることで、魅力と満足度を高めることができた。概して公民館と児童館の領域が重なる部分に、隠れたニーズや改善の余地が多く存在するとともに、それに対し、生涯学習と福祉が持つ長所を生かしアプローチすることが有効であることが分かった。時代や市民のニーズと照らし合わせ「変えてはならない価値のあるもの」と「変えた方がいいもの・変えるべきもの」を見極め、後者に対しては生涯学習の長所や公民館のノウハウを生かして改善を加える、その結果、より多くの市民に喜んでいただける。交流センターらしい取組の多くはこのような循環（サイクル）によって生まれるとともに、長所やノウハウを生かして企画する過程では、以下の視点を持って立案すると成果が上がることが明らかとなった。

(1) 地域特性からの着想　(ローカルエリアマネジメント)
(2) 地域資源との組み合わせ　(オープンイノベーション)
(3) 居場所機能の具備　(まちのサードプレイス)

ポイント１	ポイント２	ポイント３
地域特性からの着想 【ローカルエリアマネジメント】	地域資源との組み合わせ 【オープンイノベーション】	居場所機能の具備 【まちのサードプレイス】
公民館事業（生涯学習）		児童館事業（福祉）
公民館・児童館融合の運営体制 （価値観と情報の共有・窓口の統合・広い視野を備えた人材など）		

図１　交流センター事業企画のフレームワーク　　出典：筆者作成

3-2. 地域特性からの着想（ローカルエリアマネジメント）

交流センター事業を成功に導く際のポイント、１つ目は「地域特性からの着想（ローカルエリアマネジメント)」である。これは、地域によって異なる特性に目を向け、その特性を始点・出発点に事業内容や運営方法を考えていくアプローチである。「地域性を生かした運営」は、(公財)多治見市文化振興事業団が公民館で多用してきた手法ではあるが、このアプローチを、福祉を含む交流センター事業の軸に据えることで、地域の特色を生かした個性的な内容、地域の課題やニーズに合った事業、そして市民主体の展開方法を生み出すことができる。

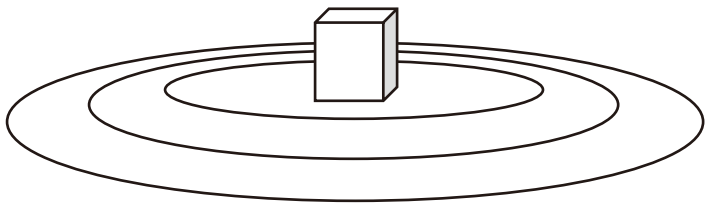

図２　「ローカルエリアマネジメント」のイメージ　　出典：筆者作成

【実践事例】ねもと三ツ星ファミリー事業　(ねもとあったかクリスマス会、みんなで田植え等)

交流センターの設立前から、根本地域には高齢者中心の活発な地域組織があり、住みよいまちにするための地域活動が根づいていたため、意欲的な高齢者がより多くの子どもたち、子育て(親)世代と関われるような事業展開を提案した。そして、「三世代の学び合い・育ち合い」をテーマにした幅広いイベントを「ねもと三ツ星ファミリー事業」と名付け、地域組織や市民がボランティアとして運営に参画することによって各世代の輪が交差する姿を目指した。以下に例を示すが、三世代が楽しみを共有できる内容を重視するとともに、企画、準備段階を含めて人の温もりや地域との一体感が感じられる展開に留意している。

■ 地域のみんなで過ごす心温まるひととき「ねもとあったかクリスマス会」

ゲームや歌の演出、サンタクロースの登場とプレゼント、ダンスの発表、ハンドベルの演奏など、時に舞台に立ったり時に客席側に移って楽しんだりして、三世代が一緒にクリスマスの楽しい時間を過ごす。また、交流センターで活動する小学生のボランティア隊「ねもとレイン

ボー☆キッズ」が主体的にイベントの運営に関わるなど、市民と手を取り合いながら地域の温かい人間関係を紡いでいる。

クリスマスソングやダンス等の発表（写真５）

ボランティアによるゲーム大会（写真６）

ハンドベルの演奏（写真７）

■ 体験学習を通した世代間交流「みんなで田植え・稲刈り・しめ縄づくり」

根本地域の核家族化が進む中、高齢者を中心とした青少年育成団体と協働し、子どもたちと子育て世代に米づくりの体験学習を提供している。交流センター周辺が豊かな自然に包まれ駅近の利便性の高いエリアであることを生かした企画であり、子どもたちへの教育的効果に加えて、サポートする大人たちも無邪気な子どもたちと触れ合うことで笑顔が多くなり、生きがいにつながる機会となっている。

例えば、みんなで芋掘り、みんなで軽スポーツ、みんなで歩こうなど、根本が誇る地域機関（自治組織、青少年育成団体、福祉団体など）との協働企画、三世代が楽しめる交流機会が多岐に広がっているが、どれも生涯学習が持つ「世代間の壁を取り除く力」を生かしている。

みんなで田植え（写真８）

しめ縄づくり（写真９）

みんなで芋掘り（写真 10）

【実践事例】精華ふれあいサロン　（おはようサロン、折り紙サロン、おしゃべりサロン）

地域の特性から着想した企画として、精華交流センターの事例を紹介する。精華地域は多治見駅周辺の中心市街地に位置し、近年のマンションや住宅地の建設によって人の流出と流入が多いエリアである。このような地域の特性に着目し誕生したのが「精華ふれあいサロン」の取組である。サロンの言葉から連想される「空間の提供」に留まらず、対象別の充実したプログラム、特に主体的な学習・文化活動を通して住民同士が自然な形で触れ合えるよう工夫し、精華地域に住む市民が求めるニーズを満たしていく。高齢者の居場所づくりを目的としたサロン事業では脳の活性化や体験の要素を積極的に取り入れ、「孤立した子育て（孤育て）」に直面する育児世代に対しては、魅力的な文化イベント等をセットにした交流機会を進めている。

■ 健康プログラム型の「おはようサロン」

平成 15 年に開始した「おはようサロン」は、高齢者にとって外出の機会とするとともに、相互交流と仲間づくりの場として地域に定着している。「健康チェック・月替わりの行事・お茶の時間」の構成を基本とし、地域の講師、保健師、病院等と連携しながら、呼吸法の学習やヨガの体験、健康や病気をテーマにした講演会、さらにはコンサートや落語会などの健康プログラムを企画する。高齢者のニーズを捉えた企画によって、健康増進、心身のリフレッシュ、そして住民同士のコミュニケーションを図っている。

■ シニア向け認知症予防の「折り紙サロン」

前掲の「おはようサロン」から発展する形で誕生したのが「折り紙サロン」である。指先を動かすことで脳の活性化や認知症の予防につなげるとともに、サロン形式で教え合い助け合いながら活動することで得られる連帯感を大切にする。「折り紙を通じた交流の場」は高齢者にとって多くのプラス効果があることが分かり、高齢化が進む地域の公民館にも広がっている。

■ 地域と共に子育てを支援する「おしゃべりサロン」

未就学児とその保護者を対象とした「おしゃべりサロン」では、年間を通して気軽に参加できるよう幼稚園が終わる時間帯に設定するとともに、月替わりで魅力的なプログラムを企画し、遊んでいる子どもたちを囲む形で親同士の交流の輪を作った。なお、精華交流センターの誕生に伴い「おしゃべりサロン」は「乳幼児クラブ」に移行し、培ったノウハウも引き継がれた。

おはようサロン（写真 11）

折り紙サロン（写真 12）

おしゃべりサロン（写真 13）

3-3. 地域資源との組み合わせ（オープンイノベーション）

交流センター事業の企画、２つ目のポイントは「地域資源との組み合わせ（オープンイノベーション）」である。「オープンイノベーション」とは、外部の資源を積極的に取り入れて新しい価値を生み出す手法であり、交流センターで「外部の資源」に当たるのが「地域の資源（人、文化、自然など）」である。各地域が有する豊かな資源を取り入れ結合することによって新しい価値を創り出すことができ、特に学習講座や体験プログラムの魅力が高められることを実感している。さらに、（公財）多治見市文化振興事業団が運営する多分野の施設（スポーツ、文化芸術、観光施設など）の資源との連携も加わり、市民の力と地域の魅力が最大限に生かされる。

「企画のヒントは地域にある」との外向きの視点に立つため、地域の変化、ニーズの変化によって新しいアイディア・企画が生まれやすい。多様化するニーズへの対応、交流センター事業の持続的な発展という意味でも必携の思考ツールである。

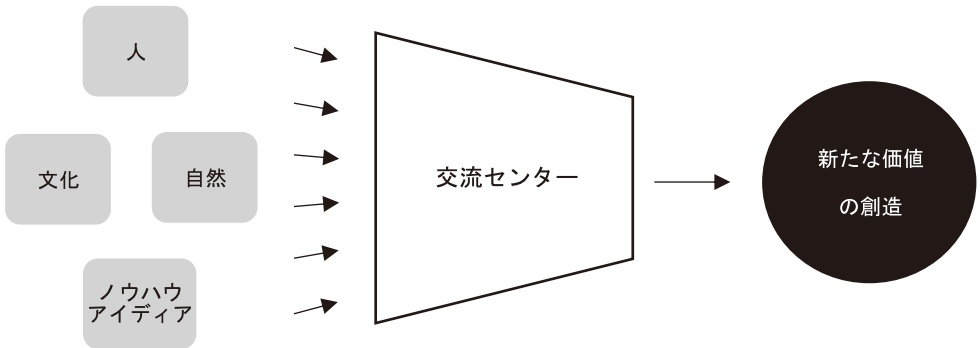

図３　「地域資源との組み合わせ」のイメージ

出典：オープンイノベーション推進協議会設立記念シンポジウム（2018 年 7 月 31 日、於：UDX シアター）基調講演（藤原洋）の資料を参考に筆者作成

【実践事例】地域の優れた人材を登用する「児童館の専科プログラム」

音楽、美術、スポーツ、料理、農業など、地域の中から専門的なスキル・知識を持つ人材を発掘し、講師・指導者として積極的に登用することで遊びのプログラムを充実させることができる。地域の大人が蓄えてきた能力や豊富な経験が、未来ある子どもたちのために還元されるほか、豊かな人材を背景に、質が高くバラエティに富んだ内容、さらには「地域で子育て」に必要な出会いが創出されるなど、「市民（参加者）・地域（講師）・交流センター（児童館）」にとって“三方良し”の手法である。今後も多くの相乗効果を理解し多用することで、より多くの市民に喜んでいただきたいと考えている。

ねもとすくすくスクール（写真 14）

ねもと卓球クラブ（写真 15）

音とともだち♪リトミック（写真 16）

【実践事例】地域再発見を目的としたウォーキング講座

定期的な運動習慣の提案に加え、地域が有する様々な魅力を紹介する機会として「学習形式のウォーキング事業」を企画している。実施にあたっては、運動指導の市民ボランティア、文化財や植物に関する知識を持つ市民がナビゲーターとして同行する、子どもから高齢者まで一緒に学び合える内容とするなど、全世代で地域の良さ（自然や文化など）を再発見し、地域への愛着と誇りが育まれるよう留意している。

講座「ねもとめぐり」（写真 17）

【実践事例】地域組織とのコラボレーション企画

交流センター（指定管理者）が持つスキルとノウハウを広く開放し、住民自ら主体的に取り組むイベントを成功に導く。地域組織（自治組織、青少年育成団体、福祉団体、教育機関など）との“ベストミックス”によって、地域のマンパワーを活かした付加価値の高いコラボレーション企画を開催するとともに、地域組織が課題とする継続的な展開、ＰＲ活動等を積極的に支援する。

お寺で坐禅会（写真 18）

交流センターでの練習会と盆踊り（写真 19）

みんなテラス／バリアフリーな遊び場（写真 20）

【実践事例】たじみオープンキャンパス事業による多彩な講座

学習館、公民館、文化会館等との連携事業「たじみオープンキャンパス」は、（公財）多治見市文化振興事業団独自の事業として 2001 年に開始して以来、「市民が主役の生涯学習」を象徴する生涯学習システムとして定着している。市民が培ってきた知識、特技、経験などを市民に還元する場を創出するなど、活動者（「教える」と「学ぶ」の両者）の発掘という点で優れた仕組みであり、交流センター等の利用者層と講座内容に広がりをもたらしている。

＜たじみオープンキャンパス事業の主な特徴＞

- 講師を希望する教えたい市民は“アドバイザー”として登録した後、講座計画を策定して提出する。
- 当財団が年４回発行する市文化情報誌「BunBun（ぶんぶん）ねっと」により受講者を募集する。
- 受講希望者が少ない場合は講座が不成立になる。
- 最長で３ヶ月間まで、受講料を低価格に設定するなど、初心者に学びやすい設定にする。

たじみオープンキャンパスの料理講座（写真 21）

3-4. 居場所機能の具備（まちのサードプレイス）

交流センター事業を成功に導く３つ目のポイントは、「居場所[4]機能の具備（まちのサードプレイス）」である。交流センターに居場所機能を整えることで、「地域の拠点施設」の姿に近づくことができる。「サードプレイス」とは自宅でも学校・職場でもない、自分にとって心地の良い時間を過ごせる第三の居場所であり、生活圏に位置する公民館は、自宅で過ごすことが多い層にとってサードプレイスの役割を担うことができる。さらに「居場所づくり」という概念は教育と福祉いずれの世界でも頻繁に使われ、かつ児童館は自由来館を基本スタイルとするため、公民館にも増して交流センターが地域住民にとっての居場所、サードプレイスになりうるのではないかと考えられる。

ただ、自由参加形式の居場所づくりは、参加への動機づけに乏しく受け身の運営になってしまう。その傾向と課題を認識する職員は、対象者の潜在ニーズからアプローチしながら具体的な事業内容を企画していく。例えば「地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果」によると、日本の地域コミュニティにおけるサードプレイスは、主に「(1)社交的交流型」「(2)目的交流型」「(3)マイプレイス型」のニーズに分類される[5]。先に詳述した「根本交流センターの多目的なロビーの活用」「精華交流センターの幅広いサロン事業」は、このうち複数の型（ニーズ）を組み合わせた居場所づくりの取組であり、とりわけ生涯学習の主体的な学習姿勢、協同学習による一体感を上手く活用して特有の課題を解決する。以下、交流センターに通う感覚が持てるような「居場所機能の具備」に関する事例を紹介する。

(1) 社交的交流型　（社交的な会話等を目的とする場所）
(2) 目的交流型　（社交以外の明確な目的を持って交流する場所）
(3) マイプレイス型　（一人で気持ちよく過ごす場所）

【実践事例】「５つの居場所機能[6]」を基準とした魅力的な遊び場　（乳幼児室・遊戯室）

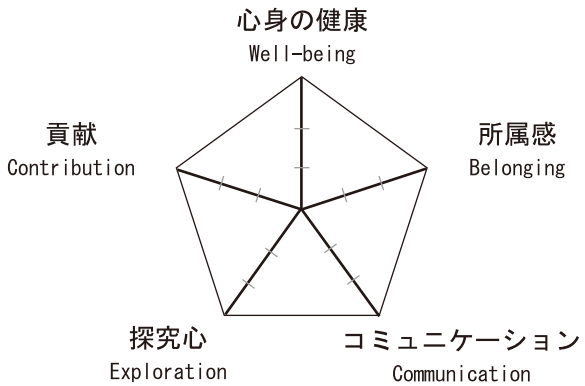

図４　交流センターの遊び場に備えるべき「５つの居場所機能」　出典：「テ・ファリキ」を参考に筆者作成

子どもたちと保護者に「何度も訪れたい」と感じてもらうために、根本交流センターの乳幼児室と遊戯室に居場所機能を整えようと試行錯誤を積み重ねた。その結果、上記の「５つの居場所機能」を兼ね備えた物的な環境と空間構成となり、魅力的な遊び環境を提供することができた。さらに、常設＝固定の遊び場とは考えず、遊び道具のバックヤードを備えて、時季やニーズに応じて変化させていくことでリピート利用を促進し、「動きのある遊び場」を印象づけて魅力を高めていった。また、子ども対象の活動プログラムの立案、その子の得意や発達のステップ等の見極めなど、この「５つの居場所機能」は子ども分野における幅広い職務への応用が利くため、児童館運営に求められる「物的環境、人的環境、活動プログラム」における価値基準（評価ツール）として位置づけることができる。

【心身の健康】

木のぬくもりを感じる玩具／玩具アドバイザー（写真 22）

【所属感】

空想の世界を分かち合う協同遊び（写真 23）

【コミュニケーション】

アナログ・ボードゲームの充実（写真 24）

【探究心】

創造力を発揮するグッドトイ（写真 25）

【貢献】

異年齢との触れ合い／ふれあい保育体験（写真 26）

【実践事例】「地域ボランティアが輝く舞台」の創造　～地域活動の拠点として～

交流センターでは、地域の中で生き生きと活躍できるよう幅広いボランティア活動を提案する。その際重視するのが運営ボランティアを主役にする視点であり、参加者だけでなく活動者が輝ける舞台を用意し、活動を通して地域（交流センター）に自分の居場所が持てるようにする。生き生きとした表情で取り組むことができる内容の提案はもちろん、ここでも交流センターの特色を生かし、子どもの発達段階に応じた活動内容、「子どもたちの笑顔を見たい気持ち」を原動力とした高齢者の地域活動、体験学習と教育的効果にあふれた世代間交流、広い共有空間の活用などに留意する。「地域活動の拠点」としての役割も担い、活動者の生きがいづくり、支え合いに富んだ地域づくりを推進する。

おはなし玉手箱／絵本の読みきかせ（写真 27）

グリーンカーテン作り／環境学習（写真 28）

プレイリーダーの育成／ボードゲームの遊び方（写真 29）

【実践事例】図書スペースの 120%有効活用 ～滞在型・カジュアル・多目的な利用形態～

ロビーの一角にある図書スペースには、年齢、個人とグループ、利用目的、滞在時間等を問わず、より多くの人々が快適に過ごせるような工夫を凝らしている。

蔵書ラインナップはコンビニエンスストアの棚づくりを参考にし、人気、おすすめ、ランキングといったニーズ志向の基準、つまり「より多くの市民が求めるもの」を重要視した選書を行う。利用促進を最優先に考えた図書スペースは、バーコードを使った便利な図書貸出システムで２週間周期の来館を促進する、出入り口には人気の雑誌を定期的に入れ替えて表紙を見せて展示する、幅広い年齢に対応した数種類の「椅子と机」を配置して自習、おしゃべり、読みきかせなどの多目的な利用を促すなど、カジュアルな図書スペースを創り上げようとしている。また、自習する受験生に声をかけ地域で子どもたちの夢を応援する交流センターらしい光景が見られるが、この図書スペースもやはり「程よい距離感で人間関係が交差するプラットフォーム」になることを意識し運営している。

全世代が寛げる図書スペース
（写真 30）

- 蔵書管理（ブラウジングコーナー、ニーズ志向の選書、図書館との連携、子どもたちの読書推進の視点）
- コーナー設定（読み聞かせ、自習、おしゃべり、絵本・児童書）
- 付帯サービス（飲み物の提供、作品展示、装飾ディスプレイ、居心地の良いチェア）

4. 公民館と児童館の融合、社会教育と福祉の結合による相乗効果

4-1. 施設の集約・複合化を生かすアプローチ　～子どもと高齢者の高い親和性～

全国の自治体で、公共施設の維持と更新を図るためのマネジメント計画が策定され、公共施設の集約・複合化によって財政負担を軽減しようとしているが、そこで挙げられるメリットは、多目的な利用、利便性の向上、共有空間の活用など、他の複合施設（ショッピングモール、道の駅、オフィスビルなど）にも通じる一般的なものが多い。交流センターにおいても、一般的なメリットを生かした取組を積極的に実施してきたが、ここでは、それらと混同することなく、公民館と児童館に特化した「組み合わせによるメリット」を掘り下げていく。

相性というものに焦点を当てると、「公民館と児童館のメリット」がクリアに見えてくる。まず特筆すべきは、子どもと高齢者の相性の良さである。公民館等においても様々な交流イベントでそれを実感していたが、児童館（乳幼児室・遊戯室）が申し込み制ではなく自由に出入りできる仕組み（自由来館制）であるため、接点が多くコミュニケーションが生まれやすい。そのため、交流センターで豊かな地域づくり、生活の質（ＱＯＬ）の向上を目指すにあたって、子どもと高齢者の高い親和性を生かさない手はないと強く感じるようになった。例えば、子どもたちの無邪気な笑顔、元気な声、旺盛な好奇心に触れ、高齢者の能動性が高まる場面に多く遭遇するため、職員は率先して子どもたちの輪に高齢者が自然に関われるような仕掛けを企画しようとする。一方、家族、学校、地域社会と自分の世界を広げながら成長する子どもたちにとっても、地域の高齢者との触れ合いは、社会性を育む上でかけがえのない経験、学びとなるため、子ども対象の生涯学習や体験活動に高齢者が、地域のイベント行事に子どもたちがボランティアとして参画することを推進している。

本稿で、子どもと高齢者の触れ合いを重視した取組を多く例示したが、子どもと高齢者の親和性とプラス効果を認識する職員であるからこそ、温かい関係性が育まれる場面、豊かな地域づくりに発展する機会を創ることができると考える。その際、児童館の事業であるのか、社会教育分野の取組であるかはどうでもよく、只々、子どもと高齢者、双方のメリットを意識した運営、市民目線の運営を行うことが求められる。

小学生と高齢者の相互交流
（写真 31）

＜高齢者にとってのプラス効果＞

- 子どもたちと話したり触れ合ったりすることで、自然な笑顔が生まれる。

・ 地域の役に立っているとの意識が、高齢者の生きがいづくりにつながる。
・ 教える立場になったり活動量が増えたりすることによって、脳の活性化が期待できる。

＜子どもにとってのプラス効果＞
・ 核家族が増える中で、大家族のような関係、雰囲気を築くことができる。
・ 社会性、思いやりの気持ち、挨拶やマナーを身につけることができる。
・ 学校では教わることができない遊びや体験ができ、幅広い知識や知恵を学ぶことができる。
・ 触れ合いの中で褒められることが多く、自信や自己肯定感を持つことができる。

4-2. 横断的な視点による分野結合の必然性　～携わる職員の心構え～

約 25 年前の 1997 年、翌月のまなびパークたじみ（学習館と図書館の複合施設）のオープンを前に、（公財）多治見市文化振興事業団は設立された。以来、生涯学習、芸術文化、児童福祉、スポーツ、自然体験、文化財など、多分野の公共施設の運営、事業活動を受託してきたが、その間、社会教育に携わる職員を中心に施設を飛び超え連携を図り、市民の多様なニーズに応えようと努めた。事業を企画する当事者からすれば目的達成のための行動に過ぎないが、外部からは高く評価されることが多い。なぜなら、この行動が「施設・部署を飛び超えた連携」であると同時に、多分野の事業を扱うがゆえに「異なる分野の結合」と捉えられるからである。ごく自然な形で複数の分野が結合する組織環境の中で、事務所も部署も一つの複合施設、根本交流センターを受託することになり、当たり前のように社会教育と福祉を結合した取組が行われていった。

さらに、（公財）多治見市文化振興事業団の連携事業の多くに、公民館や学習館などの社会教育施設が絡んでいる点にも注目する必要がある。例えば、防災意識を高めるためのワークショップ、クラシック音楽を楽しむための講座、子育てを支援するサロン事業など、社会教育という分野は、他の分野が抱える課題を解決する手段（ツール）としてその価値を発揮することができる。他の分野と同列に並ぶというよりも、各分野の土台のような立ち位置を取ることから、社会教育に携わる職員は幅広い問題意識を持ちながら、横断的な視点と分野を超えたアプローチが求められる。

このように、社会教育はどの分野とも結合できる「相性の良さ」を持ちあわせており、近年の福祉的な課題の増加に伴い、社会教育は福祉の分野・内容に手を伸ばす機会が増えていった。そして、公民館と児童館から成る交流センターが誕生し、分かりやすい形で社会教育と児童福祉の統合の動きを見ることができたが、だからといって、社会教育施設と福祉施設を合築すれば多くの効果がもたらされるほど単純な話ではない。大切なのは、職員が相乗効果を発見・認識し、その効果を引き出すための方法を試行錯誤しながら考えること、さらに得られた成功体験を運営ノウハウとして蓄え活かしていくことではないかと考える。したがって、本稿では公民館と児童館の相乗効果を発揮したノウハウを中心に報告したが、すべてが他の地域でそのまま活用できるものであるとも考えていない。今後も交流センターの価値を引き出し、より豊かな市民生活、地域づくりに貢献していくには、市民と向き合い地域の変化や施設の特徴を見つめながら、公民館と児童館、社会教育と福祉の新たな相乗効果を発見し続ける姿勢が必要であると考える。

5. 社会教育と福祉の融合・統合と施設の複合化

社会教育と福祉の融合・統合、それを具現化するための社会教育施設の複合化は、事例は数少ないが、全国的に見ても推進されている地域・自治体がある。例えば、埼玉県鶴ヶ島市では、「地域のシンボルとしての施設」・「市民の交流の拠点としての施設」・「子どもから高齢者まで各世代の交流の拠点としての施設」・「市民の学習・文化活動の拠点としての施設」・「地域の情報の拠点としての施設」として、鶴ヶ島市西公民館、鶴ヶ島市立図書館西分室、鶴ヶ島市西児童館、学童保育室「ひまわりクラブ」、福祉喫茶「よつば」の機能をもつ複合施設として、「つるがしま郷学（きょうがく）の森」が整備されている（2002 年開館）。千葉県浦安市高洲地区では、「市民の学習ニーズやさまざまな社会的課題に対応し、市民の自主的学習活動を支援するため生涯学習施設の整備を図る」として、高洲公民館、図書館高洲分館、高洲児童センター、社会福祉協議会支部、高洲移動防犯ステーション等の機能が複合する施設「地域交流プラザ・エスレ高洲」が設置されている（2010 年開館）。公民館・児童センター・放課後児童クラブが同じ建物の中にある複合施設

（さいたま市文蔵公民館）の例もある。

複合施設化のメリットは、一般的には、①利用者が多様な活動ができること、②設備等の共用により、施設機能の効率性を高めることができること、③それぞれの施設が機能を相互補完することにより、また、相互連携・協働を進めることにより、施設の活動の幅が広がること等が指摘されるが、それは、施設の単なる「同居（階層化・分離化）」であってはならない。もともとの施設の機能・目的は異なっていても、有機的に連携し、協働して役割を発揮し、相乗効果をあげていくことが重要であると言えるだろう。多治見市の「交流センター」の取組は、まさに、そうした「有機的な連携・協働」、そして「融合・統合」を目指した取組である。

（注）

1）松田武雄編著『社会教育福祉の諸相と課題』大学教育出版、2015 年。以下、松本市や松江市、ヨーロッパやアジア諸国の「社会教育福祉」実践事例についても、本書を参照。

2）同前書。

3）ゼネラリスト（一型人材）とスペシャリスト（Ｉ型人材）のメリットを兼ね備えた人材タイプであり、アルファベットの「Ｔ」の形のように、下方向に深い知識を持ちつつ、横方向に広がる幅広い知見と視野を持ち合わせる人材のことを言う。

4）心の休まる場所、自分が輝ける場所という意味で用いる。

5）片岡亜希子、石山恒貴「地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果」『地域イノベーション』（法政大学地域研究センター）、2017 年。

6）ニュージーランドのナショナルカリキュラム（日本の幼稚園教育要領に当たるもの）である「テ・ファリキ」を参考に定められる。「テ・ファリキ」は、自由遊びをメインとし、子ども自らが考えること、社会・文化的な遊び、様々な人々と関わることを重視し、４原則と５要素を組み合わせることで成り立っている。「５つの要素」には、ウェルビーイング（心身ともに幸福で健康な状態である）、所属感（子どもと家族が所属感を得ることができる）、貢献（一人ひとりの社会貢献が価値あるものとされている）、コミュニケーション（様々な言語、文化やシンボルが守られる）、探索（探究心をもって学ぶ機会がある）がある。